

卷 頭 言

アジアの加速器学会と交流を持とう



黒川 眞一*
Shin-ichi KUROKAWA*

2010年に京都で第1回が開催されたIPAC (International Particle Accelerator Conference) は、毎年、アジア、ヨーロッパ、アメリカの3地域を回りながら開催されてきており、今年の6月に第5回がドイツのドレスデンにて開かれた。アジアにおいても、第1回の京都に続き、第4回が昨年上海にて開催され、2016年5月には、第7回が韓国の釜山で開かれることが決まっている。

IPACは、北米のPAC、ヨーロッパのEPAC、アジアのAPACが統合されてできた加速器の国際会議である。APACはIPACに統合される前に4回開催されたが、参加者は300～500名程度であり、1000名を超える参加者を持ったPACとEPACにくらべて見劣りがしたことは否めない。しかしながら、IPACが立ち上がった後に、京都と上海で開催されたIPACは1200名以上が参加した本格的な国際会議であった。

近年、アジアにおいては、中国、韓国、台湾そしてインドにおいて急速な加速器科学の興隆がみられる。中国では、広東省の東莞市に中性子源CSNSが建設中であり、北京の高能物理研究所と蘭州の近代物理研究所でADSの10 MeV injectorの開発が急速に進んでいる。韓国においては、慶州のKOMACで100 MeVの陽子線形加速器が1年前からユーザのための運転を開始しており、浦項のPALで建設中のXFELも2015年中に運転を開始する予定である。太田においては、超伝導linacを主要装置とする重イオン加速器システムRISPの設計研究が精力的に行われており、土地の取得にめどが付き、建設が開始される予定である。台湾のNSRRCにおいては、1.2 nmというアジア最小のエミッタンスを持つ周長518 mのTPSが建設の最終段階を迎えており、2015年からユーザ運転が開始される見込みである。インドでは、ADSに向けての超伝導加速空洞の開発研究が活発に行われている。

中国、韓国、そしてインドには、私たちの加速器学会年会に相当するdomestic accelerator conferenceが存在する。まず中国では、今年10月22日から25日にかけて、武漢の华中科技大学(HUST)で第2回中国加速器会議が開催される。中国では、国内の加速器会議は4年ごとに開かれることになっており、まだ、第2回目であるが、加速器のアクティビティの活発化に伴い、今後開催頻度があがるものと思われる。韓国では、毎年、ICABU (International Conference on Accelerator and Beam Utilization) が開かれており、今年の11月12～14日に太田で第18回ICABUが開かれる。なお、ICABUは実質的には国内加速器会議であるが、建前上は、国際会議であり、使用言語は英語である。インドでは、InPAC (Indian Particle Accelerator Conference) が2年ごとに開催されており、次回の第7回 InPACは2015年末にBilaspurのGuru Ghasidas Universityを会場として開かれる。インドは英語が公用語の一つであり、InPACの発表と論文の記述は英語でなされる。

日本加速器学会として、これらの国々の加速器会議に代表を派遣し、また、日本の加速器学会年会に代表者を招待することを提案したい。

* 高エネルギー加速器研究機構 名誉教授
Cosylab d.d. 副社長